

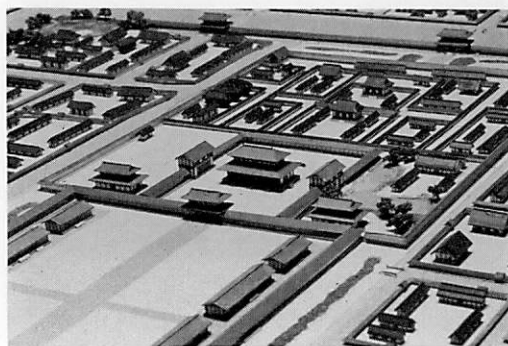
飛鳥・藤原京復原模型の製作

飛鳥資料館

飛鳥資料館では展示内容の充実に努めているが、本年度はその一環として、飛鳥・藤原京復原模型を製作した。模型の縮尺は1,000分の1とし、飛鳥・藤原京域を中心とする5.5km四方の範囲を復原の対象とした。地形の復原は奈文研作成1,000分の1地形図をベースとし、これまでの調査研究の成果に基いて、若干の改変を施した。たとえば、藤原京域内を斜めに縦断する飛鳥川については、後世の改修の形跡が明らかであり、現流路の周辺に残る彎曲した水田畦畔等の地割をもとに、やや蛇行する旧流路を復原した。また藤原宮東方に流れる中川は東三坊大路推定位置に沿って南北に通じているので、京内の堀河であったとする見解をうけて、これを人工的に整備した運河として復原した。その他にも、発掘調査の成果や地形の状況を検討して、1300年前の景観の復原に努めたが、もとより不明な点はおびただしく、推定あるいは想定をたくましくせざるをえなかった部分も多い。なかでも、景観上最も重要な要素となる藤原京の規模や位置についてさえ、近年いくつかの異説が唱えられているし、あるいは、都の周辺に広がる広大な水田の田制に関しても、現在みられる条里制と異なっていたことは確かであるが、その実情は必ずしも明らかにされていない。こうした多くの基本的な問題点があったことに加えて、製作期間がきわめて限られていたために、所期の目論見を十分に表現しきれなかった部分もいくつか残された。

全体で使用した建物は50種およそ8,000棟、枝振りを表した樹木は13,000本をかぞえる。藤原宮大極殿院の諸建物や寺院伽藍建物など一点ずつ個別につくった特殊な建造物以外は、木片とアクリル板で製作した原型をもとに複数の雌型をつくり、それに合成樹脂を流し込んで大量製作する方法をとった。また地形ベースの製作は、地形図の大きさ、つまり100cm×70cmのブロックごとに行った。従って、完成した5.5m四方の大復原模型は、全体で48個のブロックに容易に分割できるようになっている。なお、模型の土台づくりから、最後の仕上げまで、製作作業のほぼ全工程は、すべて当館の手で行った。

(井上和人)



藤原宮中枢部



藤原京大宮大寺周辺